硬筆・毛筆書写 実力養成講座 その2

—書写の基本② 行書・草書—

中央審査委員　平形精逸

第一回の楷書・片仮名に続いて、今回は行書と草書を取り上げます。行書は可読性を保ちつつも速く書け、日常よく使われるので三級以上の級で出題されます。草書は書写の伝統や特質を理解するために不可欠であることから、準一級と一級では必修となっています。

行書答案の書き方

左の図からもおわかりのように、行書は中学校書写で中心的に取り上げる書体です。行書の特徴は小学校で既習している楷書と比べながら説明するのが一般的です。行書といっても全く別の書体ではなく字形の大半は楷書と同じですから、整斉な楷書が書けることが前提となります。

行書の特徴を左下にまとめてみました。まず「**点画の丸み**」とは転折部で楷書のように止めてから方向を変えるのではなくそのまま曲がることをいいます。青信号での自転車の軌跡をイメージすればよいでしょう。

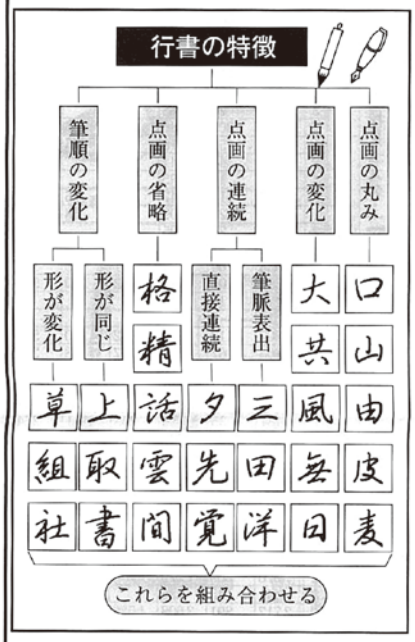
「**点画の変化**」は速く書ける楷書の許容される形とリンクしています。図では標準字体と比較すると、上から「右はらい・点・方向・長さ」がそれぞれ変化していますが、行書で「日」の三画目の収筆部が縦画部に接しないのも同じことです。

「**点画の連続**」には、筆(ペン)脈が実線として表れる場合と、二画がV字(一画)化する直接連続があります。行書というと続け字の印象から連続線を多用する答案を見かけますが読みにくくなるのでご注意しましょう。

「**点画の省略**」は速く書くために画を短くしたり込み入った部分の点を略したりすることです。「木偏・のぎ偏」の点の省略や「言偏・雨冠・門構え」などの略し方には決まりがありますから覚えておくと便利です。

「**筆順の変化**」には二種類ありますがその根拠は古典を学習するとよく理解できます。

以上の五つの特徴は、必ずそうなるというわけではなく、そうなる場合があるということです。楷書に近い行書から草書に近い行書まで非常に幅が広いということも理解しておきましょう。また筆脈の連続線が多いほど画を短少化したり省略部分も多くして書写で大切な**簡潔性**を保つことも大切です。行書の特徴を組み合わせながら、すっきりとした明るい線質で答案を作成して下さい。



右図の上段は、文字は左側が前ですから左向きにして三体の特徴を示しています。楷書は静止形で書き方は同様ですが、太さを伴いますので線質を工夫することが重要となります。

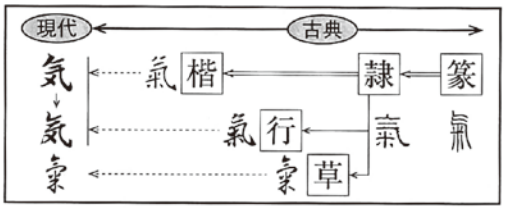
宋時代の書家・**蘇東坡**が書体を人間の動作に例えた「真(楷書)は立つが如く、行は行く(歩く)が如く、草は走るが如し」はあまりに有名です。

毛筆でも行書の基本的な一種類ですが、行書は歩く速度に個人差があるのと同様、書き方も数種類考えられます。楷書に近いものでは、転折に丸みをつけ点画の収筆に次画へ向かってはね出し線をつければそれでも立派な行書ということになります。

また、行書は書くにしたがって加速されることから、同一方向の点画が重なる場合、連続や省略が後ろの方で多く出現する傾向があります。「三水」の二・三画を連続させたり「書」で下方の略化が大きかったりするのはその好例です。

三級ならば行書の特徴を理解しながら解答できますが、二級以上は、「集字聖教序」や「蘭亭序」などの古典を臨書することによって**遅速緩急**による運筆のリズムや線情の変化を学習し、答案に生かしたいものです。

墨は墨液でも構いませんが、墨継ぎは少しでも少なくして流動感豊かなものにしあげましょう。



《硬筆・毛筆》書写検定の構造＝実技＝

級	5級	4級	3級	2級	準1級	1級
文字を書くことの側面	実用性（書写）				芸術性（書道）	
文字感覚	〈正しく〉→〈整えて〉→〈美しく〉					
学校対応	小学校→	中学校→	高校→大学・一般			
領域（文字の種類・書式など）：漢字（書体など）	（許容の書き方）（書写体）：楷書	楷書	行書	臨書（楷・行・草・隷書）（毛筆のみ）	草書	創作
領域：仮名	平仮名（単体）	平仮名（連綿）	平仮名（連綿）	臨書（毛筆のみ）	臨書（毛筆のみ）	創作
領域：仮名	片仮名（毛筆のみ）	片仮名（毛筆のみ）	片仮名（毛筆のみ）	片仮名（毛筆のみ）	片仮名（毛筆のみ）	片仮名（毛筆のみ）
領域：文章及び文書	縦書き・横書き（硬筆のみ）	縦書き・横書き（硬筆のみ）	はがき・掲示物	はがき・掲示物	創作	賞状（毛筆のみ）
視写及び聴写	速書き（硬筆のみ）	速書き（硬筆のみ）	速書き（硬筆のみ）	速書き（硬筆のみ）	速書き（硬筆のみ）	速書き（硬筆のみ）

行書・草書級別出題問題

（　）は問の部分に出題

級	硬筆 行	硬筆 草	毛筆 行	毛筆 草
1	(2)問		(1)問	
準1	(2)問		(1)問	
2	(2)問	—	(1)問	—
3	(2)問	—	2問	—
4	—		—	
5	—		—	

草書答案の書き方

草書が難しいのは特有の形を覚えなければならないからです。行書は楷書をもとにすれば書けましたが、行書の中には草書の速書きとして説明できないものがあります。

左の図でおわかりのように、草書は楷書や行書から生まれたのではなく、隷書を母体としています。

新字体の中でも「会・実・桜・学」のように草書体から作られたものは続ければ草書になりますが、**旧字体**の一部分を新字体とした「気・売」や「声・医・圧」などはそのまま続けても草書とは認められません。伝統によって継承されてきた旧字体による形で書くことになります。旧字体の字画は隷書とほとんど同じだからです。特に注意したい草書体を下表にまとめましたので参考にして下さい。

また草書は、書論で有名な『**書譜**』に「草は使転に乖(そむ)けば字を成す能はず」とあるように、曲線のちょっとした書き方の違いによって別の字になってしまいます。異なる部首も同一の形に類化されることもあります。参考書で確実に習得することが大切です。

草書の形を正確に覚えたら、美しくさわやかな線で書くことを心掛けましょう。また、既出の課題文字は季節によって傾向が異なります。硬筆の一・準一級第二問を下表にまとめましたので参考にして下さい。

さらに、答案は配置よく書くことも重要です。

枠内におさめる場合、硬筆の一級では一区切り4cmくらいですから、目測してから書くと均等になるでしょう。下方がつまるより空くくらいの方が明るい感じがします。また、左側を見ながら書くとそろえやすいので硬毛共に一級や準一級は草書から書きはじめ行書、楷書に及ぶとよいでしょう。毛筆では古くから全体構成のことは**章法**とよばれ、いっそう重視されます。

＝(問違いやすい)新旧字体と草書体(例)＝

気	氣	氣	売	賣	売	賣	売	賣	売
声	聲	聲	円	圓	円	圓	円	圓	円
医	醫	醫	囲	圍	囲	圍	囲	圍	囲
圧	壓	壓	駅	驛	駅	驛	駅	驛	駅
担	擔	擔	称	稱	称	稱	称	稱	称
昼	晝	晝	処	處	処	處	処	處	処
仏	佛	佛	応	應	応	應	応	應	応
鉄	鐵	鐵	当	當	当	當	当	當	当
変	變	変	台	臺	台	臺	台	臺	台

＝硬筆(準一級)第二問出題文字回数＝

出題回数	準1級(10回分) 一回	準1級(10回分) 二回	準1級(10回分) 三回	1級(11回分) 一回	1級(11回分) 二回	1級(11回分) 三回
5回	春雲		梅			春
4回	風竹	秋	春雪	花清風	紅海松	花
3回	白雨光水香開	山白雲風夜紅清	花風松	雲香泉聲	月長夜雲葉露	光風梅新節